OCUAC

大阪市立大学山岳会会報　No. 47　2008. 12. 25

目次

		頁
5月山行		
・鹿島槍ヶ岳東尾根・二の沢頭（現役・ＯＢ山行）	兵頭　渉	2
・立山山スキーと白馬岳主稜登攀	武部　秀夫	3
7月山行		
・木曽駒ケ岳から空木岳へ（現役・ＯＢ山行）	吉村　治代	4, 5
オーストリア　チロルハイキング	上田　忠士	6, 7
カムチャッカ・アバチャ山　途中記	島川　勝	8, 9
秋の山行		
・上高地～槍ヶ岳・笠ヶ岳～新穂高（現役・ＯＢ山行）	松本　和也	10, 11
・黒戸尾根から地蔵尾根へ	山田　裕敏	12, 13
ネパールの旅		
・マナスル周遊とラルキャ峰登攀	佐々木　惣四郎	14
・マナスル山群一周・撮影行	小林　深	15, 16
廣谷氏インタビュー（その２）＆補記	奥田　寛	17～20
カムチャッカの山		21
写真集		22, 23
編集後記		23

鹿島槍ヶ岳･東尾根･二ノ沢の頭（現役・OB 山行）

兵頭　渉

計画　　：東尾根〜鹿島槍ヶ岳〜冷池ＴＳ〜爺ヶ岳往復〜赤岩尾根（5/3-5/6）
メンバー　：（山岳部現役）松本、（山岳会）吉村、兵頭

一昨年５月に山岳会メンバーで天狗尾根を登攀した際、次は荒沢を隔ててクッキリとした稜線を見せる東尾根に挑戦しようと決めていた。
今回は、４月の総会の折りに参加の意思を示した現役を交え３名で５月の鹿島槍・東尾根を目指すこととした。

５月２日深夜、JR 塩尻駅で現役の M 君、山岳会の Y さんをピックアップ、国道沿いのスーパーにて食料の買い出し、翌朝２時、ヒュッテ雪線にて装備、食料点検し、明日からの晴天を祈って就寝。
５月３日６時、ヒュッテ雪線出発、芽吹の緑に囲まれた鹿島の集落を過ぎ大谷原の登山口駐車場８時半着、日は射すものの稜線は雲に覆われている。
今日の幕営予定地東尾根・二ノ沢の頭（2170m）目指し、東尾根への取付点の赤旗を探しながら大冷沢沿いの林道を辿る。西俣出合い１０時着、某大学山岳部のテントの横を過ぎ北股本谷左岸沿いに取付点を探しながら辿るも急峻な崖とデブリの詰まった細い沢！更に上流から取付くべく、雪渓が薄く雪解け水の強い流れに緊張しつつ右岸へ渡渉。本谷を遡ること一時間、取付点の赤布は見当らず。取付点を見逃して上流まで来すぎた様だ。引き返して登り直すと今日中に一ノ沢の頭までも覚束ない。腹ごしらえをして一ノ沢の頭に突き上げていると思える沢を詰めることとした。登り始めた途端小さな雪の固まりがパラパラと落ちて来る、沢の中は危なそうなので左岸のブッシュに潜り込む。脆い草付、滑る熊笹、行く手を阻む密生した灌木。格闘２時間、一ノ沢の頭から南南東に派生する尾根及び沢の上部が見渡せる場所で一休み。この後のルートを検討する。
沢の右岸に渡って一ノ沢の頭南斜面の草付雪面を直上するか？もう少し藪漕ぎをして派生尾根に出るか？迷った末後者を選択し尾根上へ。３人がキツイ藪漕ぎを終え上部ルートを相談中、先ほどルート候補に挙げた斜面にブロック雪崩が発生、断続的に１０分ほど続き、あのルートを取っていたら今頃は！！と肝を冷やすやら、ホッとするやらで大休憩。気を取り直し、腐り始めた雪面に足を取られたり、腰まで嵌ったり、転倒したり、偵察したり、結果１７時過ぎ一ノ沢の頭に到着。標高差 500mを５時間かけて（標高時速 100m！）登ったことになる。テント設営、夕食、明日以降の行動予定を確認して就寝。明日は空身で荒沢の頭、あわよくば鹿島槍頂上往復し一泊。明後日下山とする。
５月４日５時起床、晴天、朝日に照らされる荒沢奥壁、右に一昨年トレースした天狗尾根の稜線を曳く。登攀用具、昼食、ライト/雨具をザックに入れ７時半ＴＳ出発。這松のリッジ、荒沢の雪渓まで続く急な雪面のトラバース、傾斜のある細いスノーリッジを渡り、急な雪面にピッケル差込み攀じると広い二ノ沢の頭に出る。ＴＳ（一ノ沢の頭）から１時間弱である。上部、第一岩峰、第二岩峰を見上げれば、既に渋滞、取付には沢山の人影が見える。出発の際の目論見は早々に断念、付近で雪上訓練をしてテントへ戻ることとした。二ノ沢の頭からの下りは、雪が緩んでいることもあり、訓練も兼ねてザイルを出した。細いスノーリッジの下りはバランスを取るのが難しく馬乗りで下降した。
１６時テント帰着、振り返ると第二岩峰の上の雪田を最後パーティーが登っていた。
５月５日、５時起床、一帯はガスに包まれ視界２０ｍ。テントを畳んで７時出発。登りの反省から所々に残る雪の上の足跡を確認しながら尾根筋を忠実に辿って高度を下げる。１１時林道へ降り立つ。薬師の湯、昼食、ヒュッテ雪線へ。次回、完登を期す！！

立山・山スキーと白馬岳・主稜登攀

武部秀夫

5月山は立山での山スキーと白馬岳主稜クライミングでした。山スキーパートナーは妻がほとんどです。クライミングは岡山の山仲間です。4月末の前半と5月始めの後半の2回の北アでした。

（立山・御山谷滑降）

2008年4月28日（月）、天気：快晴、パートナー：武部直子（妻）

記録：みくりガ池温泉（8：45）～一の越（10：15）～雄山往復後一の越から滑降発（12：00）～黒部湖湖畔着（14：00）～黒部ダム（16：00）～室堂（17：15）～みくりガ池温泉（17：40）

装備：ビンディング「フリッチ・ディアミールエクスプローラー」、山スキー板「トラブツアーズ」、山スキー靴「ガルモントGライト」

快晴の朝、一の越めざしシール登行。山々愛でながらゆっくり登行。シールがよく効く。雄山へはアイゼンに換え往復。さあ黒部へ下ろう。斜度は急な所でも20度ぐらいの楽しい沢。広い沢なのでシュプールはどこでも描ける。両方の支沢からは多くのデブリがでている。標高2000mあたりから御山谷は屈曲し沢幅も狭くなる。右岸を滑る雪多く、結局黒部湖湖畔まで滑れた。滑降距離5500m、滑降高度差1250m。初心者の私たちでも大いに楽しめた沢でした。湖畔をトレースどおりに歩き黒部ダムへ。室堂へは、交通手段で戻りました。楽しみました。タンボ平にも多くのシュプールがありました。（この山スキー行は写真ありません）次はテレマークスキーで滑りたい。

（白馬岳主稜）

2008年5月3日～5日　天気：晴、曇り、パートナー：岡山ランタン同人隊で5名

記録：5月3日入山　猿倉着（12：00）～白馬尻（14：00）後雪上訓練、テント泊

5月4日登攀　テント発（6：00）～白馬主稜P8（9：00）～白馬岳（16：45）～白馬山荘（17：00）山荘泊

5月5日下山　山荘（8：00）～大雪渓経由白馬尻テント地（10：30）～猿倉（12：15）

楽しいクラシックルートを、ということで「白馬岳主稜」に行きました。私は昔に現役時1回登攀したルートです。体力勝負のルート、また頂上直下は雪の急峻なファイナルウオールが60m、最後は雪庇のトンネル掘りの思い出しかなし。今回はトンネル掘りはありませんでしたが、長大なよいルートでした。60歳台の方もいてゆっくり、しかもロープも小まめに出し、安全第一で結局10時間以上かかりました。小屋で泊まり、翌日は、尻セード交え2時間半で白馬尻のテント着。撤収後猿倉に着くと、雨が降り出しました。天候にはラッキーでした。

木曽駒ヶ岳から空木岳へ（現役・OB 山行）

吉村　治代

計画：中央アルプス縦走（「ヒュッテ雪線」～木曽駒ヶ岳・空木岳～「ヒュッテ雪線」）
　　７月１１日～１３日（２泊３日）
参加者：関西組　上堂、佐々木、松本（現役）、吉村
　　関東組　山田、兵頭

今年、賛助会員にさせて頂きました吉村です。今回の夏山縦走について書かせて頂きます。

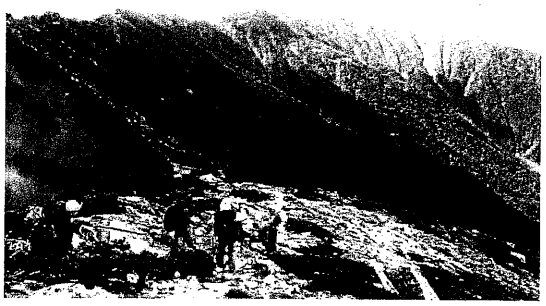
７月１０日　夜　　「ヒュッテ雪線」　集合
７月１１日
「ヒュッテ雪線」出発　６：００＝６：４０　桂木場
７：　００＝９：００　馬返し　９：３０＝１０：００　大樽小屋
１０：３０＝１２：３０　将棊頭山　１３：３０＝１４：３０　馬の背分岐
１３：００＝１４：３０　木曽駒ヶ岳　１５：００＝１５：１５　駒ヶ岳頂上山荘／テント場
時間データは兵頭さんから頂いたものですが、私はもう少し時間がかかったように思います。
この日の記憶は、お水をいっぱい飲んだ事、大樽小屋のおトイレが広くて綺麗だった事。
お天気が、晴れたり曇ったり、雨が降ったりだった事。足を高く上げないと登れない所が多かった事。広々したところで休憩した時少々寝た事。この後、上堂さん、佐々木さん、山田さん、松本君から遅れを取ってしまい、チョット道に迷った事。
テント場は霧の中で、夏なのに寒く、夜は６人寝ているからテントが浮かないぐらいの凄い風だった事です。

７月１２日
テント場　５：００＝６：３０　宝剣岳７：００　＝８：００　極楽平
８：３０＝１１：３０　檜尾岳　１２：３０＝１５：００　木曽殿
１５：１０＝１７：００　空木岳　１７：３０＝１８：３０　空木平避難小屋／テント場
霧と強風の中テント場を出発！ 強風で吹き飛ばされそうになりながら宝剣岳を越えました。私は此処で険しい所は終わったと思いニンマリ！昨日の疲れはあったものの元気でした。だがしかしでした！何処までも続く歩きにくい道で、宝剣を越え極楽平を過ぎた辺りから上堂さん、佐々木さん、山田さん、松本君から又遅れを取ってしまい、雲がとれ空木に続く果てしない稜線と高嶺の花と、南アルプス、中央アルプス、伊那谷の素晴しい景色に満足しながらも、兵頭さんに荷物を助けて頂き、まだ続くのかーーと思いながら歩きました。
木曽殿小屋に着いた時、此処で本日リタイヤの選択肢があれば、それを選んだでしょうが、とにかく空木まで行くのダーー！ということで、目の前にまっすぐ伸びる昇りを登り始めました。このころからとにかく空木平避難小屋までと諦めが付き、急な岩も楽しく登ることが出来ました。空木岳山頂の岩が見えたときは走れるものなら一刻も早く着きたい気持ちになりました。空木平避

難小屋場までの下りは雪渓もあり、たどり着く為には歩かなくてはと言う思いでひたすら歩きました。
空木平避難小屋で上堂さん、佐々木さん、山田さん、松本君の温かいお迎えを受けて、
とっても嬉しく、此処までこれて良かったと感謝しました。

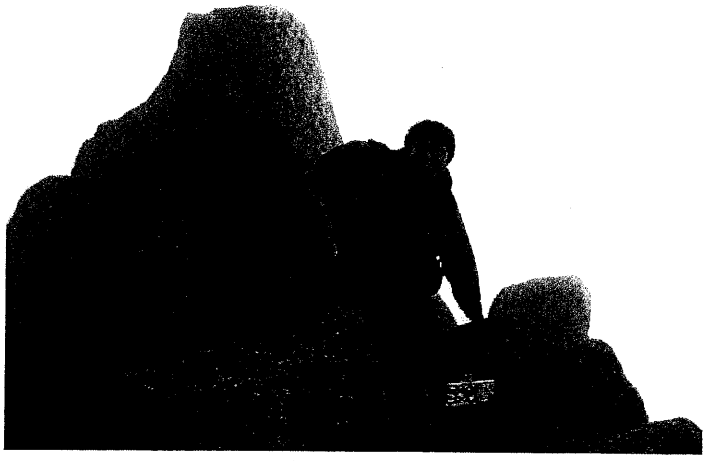
７月１３日
空木平避難小屋７：００＝９：３０　池山小屋　１０：００ ＝１１：００　駐車場
１１：３０＝１２：００　「ヒュッテ雪線」
今日は下りだけですよね！と念を押して空木平避難小屋を出発。決して短くはない道のりですが、
下りだけなのでややゆとりで登っていく人とすれ違うたびに、大変だよと心の中で思っていました。
池山の水場でたっぷり、美味しいお水を飲んでラスト駐車場まで。
佐々木さん、山田さんは先に出発されて、驚きの速さで、「ヒュッテ雪線」まで踏破！！
凄いです。全員無事下山で、「こぶしの湯」で疲れを癒し、それぞれ家路へ。

何時も千畳敷までのバス代、ロープウエイ代が高いと思っていましたが、次回からは迷いなく利用出来ると思います。今回も皆様のお蔭で、重厚な夏期縦走が無事出来て感謝いたします。楽しかったです！！ありがとうございました。



雲あがる

木曾駒山荘へ



宝剣頂上の松本君

オーストリア　チロルハイキング

上田　忠士

家内とオーストリア・チロル地方にハイキング旅行に出かけた。ウイーン、ザルツブルク、インスブルックなどで名所旧跡観光をし、登山基地にも数日滞在しハイキングをした。

7/5～7/8　前日深夜カタール航空で関空出発、ドーハ経由ウイーンへ。ウイーン国際空港から国鉄、地下鉄で予約しているYHへ、旅装を解く。ウイーンではシェーンブルン宮殿など観光、ハプスブルク家の歴史、豪華な生活の一端を知ることが出来た。「ドナウ川下り」はバッハウ渓谷を1時間余下るが、水量多く、川幅いっぱいに流れている。天気がよく左岸、右岸の古城、ぶどう畑が広がるすばらしい景色だ。ウイーンの森にも出かけ、ベートウベンの道を歩きワインの里グリンツイングに向った。ここはワイン酒場「ホイリゲ」の多いところ。ライブ演奏中のホイリゲで夕食。

7/8～7/11

列車でザルツブルクへ移動。ザルツカンマーグート観光バスツアーに参加。映画「サウンド　オブ　ミュージック」の撮影舞台になったところで湖と山の美しいところだ。市内ではホーエンザルツブルク城塞など見所が多く、ここはアルプスの展望台にもなっているところだ。

7/11～7/14　ハイリゲンブルート滞在

1日1本のグロースグロックナー山岳道路を走るバスに乗車。ヘアピンカーブ連続の道をぐんぐん上る。雄大な山岳風景が広がる。氷河に覆われたアルプスの峰々が見えすばらしい景色だ。終点フランツ・ヨーゼフス・ヘーエへ2時間半。ここは標高2300m。パスツエル氷河に降りてハイリゲンブルートへの道を歩く。氷河の上方奥に聳える真っ白のJohannis-berg山が美しい。バス30分でハイリゲンブルートへ。ここは標高1300m. 人口1200人の静かな登山基地である。

7/12（土）晴れ。午後一時小雨。　ハイキング

朝食8:00.　雨が止み晴れてきたので9:10出発した。地図を片手に歩くが、ハイカーに殆ど会わない。標識も親切にあるとは言えない。農家で聞くが、英語が通じなくドイツ語で単語を並べて何とか意思の疎通を計る。Hohe-wand　を経て不明瞭な赤白のマークを見つけてメル川方面に下り、フランツ・ヨーゼフ・ヘーエとハイリゲンブルートを結ぶトレッキングコースに出た。ここから上方に登り、Bricciukaplle 教会を過ぎ分岐の橋で引き返した。途中ハイリゲンブルートを俯瞰したが、教会を中心に緑に囲まれた美しい集落だ。

7/13（日）雨、曇り　ハイキング

昨夜気温が下がったようで、遠くの山が雪化粧していた。雨が止んだので出発した。シャレックのゴンドラ中間駅ロスバッハまで歩く。誰にも会わない静かな歩きだ。高山花だけが待ってくれている。ロスバッハまで420mの登り。ガスで視界はよくないが、ゴンドラに乗りシャレックまで上る。頂上（2556m）はガスで視界100～200m、遠望は全くきかない。レストランで休憩とランチ。ゴンドラでロスバッハまで下ると、雨も止みガスも晴れてきたのでここから歩いて下山した。ハイリゲンブルートのメス川周辺を散策し、教会、スーパーにも寄ってＹＨに帰着。

7/14～7/18　Zell am Seeで1泊し、マイアーホーフェン滞在

9:00のバスでハイリゲンブルートを離れ、フランツ・ヨーゼフス・ヘーエに向った。ザックをロッカーに預けパノラマWegを歩いた後、Oberwalder-Hutteへ向うトレッキングコースを歩く。このコースは標高2400mから2500m。左下にオーストリア最大のパステルツエ氷河を見下ろし、正面のグロースグロックナーは残念ながら頂が見えない。天気が良くないからかトレッカーは少ない。右手上方には

アイベックの姿があり、左手下方にはマーモントが草を食んでいる。時々みぞれが降ってきてセーター、雨具を着る。高山花も豊富で今は少なくなったと言われる、エーデルヴァイスも見つけた。氷河が迫り、雪渓を2箇所越えたところで引き返した。Zell am See ではミッテルステーション（1411m）へハイキング。青い Zell 湖と町が眼下に見え、まるで絵のようだ。この周辺は広大な Ski 場、冬季は賑わうようである。往復3時間50分、高度差700m のハイキングであった。Zillertalbahn で1時間車窓の景色を楽しみながらマイアーホーフェンに向う。ここは人口3700人、トレッキング、登山、冬は Ski の基地のようである。教会近くのホテル「Zillertal-hof」に Check-in。ここは四つ星ホテル。Dinner の雰囲気は優雅で、客筋もよさそうであるが、我々トレッカーには不向きだ。

7/16　（水）　晴れ。ハイキング

天気もよく9：10出発。ペンケンバーンゴンドラに乗り、さらにリフトに乗り継いで2000mまで昇る。ここから緩やかな稜線を Zillertal アルペンの山々を見ながらゆっくり歩く。この周辺は草原になっており見晴らしがいい。トレッカー姿もよく見かける。やや下ってから500mぐらい登ると Wanglspitze（2420m）の頂上だ。2時間半かかった。360度の眺望とランチ。下りはペンケンヨッホまで往路を取り、ここからはお花畑に囲まれたルート22a を只管下るが、マイアーホーフェンの中心地を俯瞰し退屈しない。マイアーホーフェンまで下り3時間半、高度差1800mは長かった。

7/17　（木）雨、曇り　ハイキング

天気がよくない。雲も厚いので山に登ることは止め、Wassenfall 滝を見に行く。マイアーホーフェンに注ぎ込む川の一つ Stillupbach　沿いの自動車も走る道を歩き、Lacknerburn　を越えて人造湖に着いた。ここは昨日トレッキング中にマイアーホーフェンを隔てた向かい側に青く見えた湖だ。湖畔に大きな Wassenfall 滝があり、観光客が車、自転車で多くきていた。四ツ星ホテルの夕食も３日目になると飽きて、今夕私は Vegetarian food　にしてもらった。ここの泊まり客はイギリス、ドイツからが多いようで、1～2週間連泊のようだ。話してびっくりしたが、いったいここで何をするのだろうか。我々はここマイアーホーフェンに３泊したが、日本人を始め東洋系、イスラム系の人は全く見なかった。

7/18～7/20　バスでイエンバッハ経由インスブルックへ向う。

7/19　（金）晴れ。ハイキング。

今日もいい天気なのでバスでイグルスに行き、ゴンドラ（オリンピア・エクスプレス）でパッチャーコッフェルへ昇る。ここは標高2000mのハイキングのスタート地点。左方眼下にインスブルック市街地を見下ろし、その後方と前方に氷河の残るアルプスの峰々見ながら歩く。ここはツインベン Weg で初心者向けの起伏の少ないコースである。ハイカーも多い。「こんにちは」と日本語で挨拶されることもあった。牧場のあるトルファインアルム（2035m）まで2時間半。ここでランチ。登山口トルフェス（922m）まで高山花の多い、オリンピックスキーコースを下ったが高度差1100mは長かった。

7/20～7/21　ウイーンへ１泊後出国

早朝 YH 周辺のイン川畔を散策、いい Walking 道がある。特急列車でウイーンに向う、５時間の列車旅だ。ドナウ川近くの YH に Check-in 後、グリンツイングに出かけホイリゲでワインとオーストリア料理でオーストリア最後の夜を過ごした。翌日ステファン寺院、王宮を見物。午後16：40、カタール航空でオーストリアを離れた。座席について、旅行計画を消化し終えてホットした。

＊　チロルの山並みはスイスのような針峰はなく、高度も低い。スケールは大きくないが静かで素朴な田園が広がっている。

カムチャツカ・アバチャ山途中記

島　川　　勝

私にカムチャツカへ行きたいとの思いを募らせたのは写真家星野道夫である。星野は、アラスカに生きる動物や植物を悠久の言葉で紡いだ。この星野がカムチャツカ半島の南端部のクリル湖周辺でヒグマに襲われ死亡してから１０年以上も過ぎて、星野の友人達が「星野道夫永遠のまなざし」という本を出版し、何故ベテランの星野がヒグマに襲われたのかとその原因を探った。そのようなカムチャツカの土地を見てみたいというのが今回の登山の動機であった。

カムチャツカへは、東京と大阪からウラジオストック航空の便がある。
８月１５日、大阪からは、ツアー会社のメンバーがなかったので、東京成田から出発した。いきなり出発時間が３０分早くなったり、飛行機の座席のシートベルトが壊れていて席を替わったことがあったが、これはロシア的大雑把であると、少しは不安を覚えつつ自分を納得させた。東京から約３時間半のフライトで、カムチャツカの中間の位置にある最大の町であるペトロパブロフスクカムチャスキーに着いた。意外に日本から近いのである。そこからバスで、パラトゥンカ温泉郷にあるフラミンゴホテルに着いた。カムチャツカは火山でできた土地であり温泉が多い。しかし温泉と言っても日本と様子は大分異なる。ただプールみたいなとても広いところで、水着を着てつかるだけである。
翌８月１６日はホテルから、巨大な４輪駆動の改造バスに乗って、アバチャ山麓のキャンプ地（８００メートル）まで向かった。改造バスは、途中からアバチャ山から流れる川底を走ったので、左右上下に大きく揺れながら２.５時間ぐらいで山麓キャンプ地に着いた。キャンプ地には、小さな小屋風の建物が幾つかあった、中は二段ベットである。
標高は８００メートルだが、緯度が高いので、周りには、アツモリソウ、ハクサンイチゲ、チョウノスケソウなどの北海道や樺太にみられる高山植物が一面に咲いていた。日本からの観光客が何組かこの高山植物を見に来ていた。またキャンプ地から少し登ると雪渓があった。ここにスキーの練習場があり、プーチンも来たそうである。
さて、翌８月１７日は、アバチャ山（２７４１メートル）に登頂予定であったが、前日の夜半から風と雨が強くなりベットがはげしく揺れていた。朝になっても風雨は収まらず様子をみたが、その日は沈殿となった。キャンプ地には、狐が出てきたり、マーモットがチョロチョロと顔を出したりして退屈しない。午後少し風雨が収まったので、キャンプ地から１時間余りで行ける通称「らくだ山」で足慣らしをした。夜は、キャンプで家族が経営している食堂で、コック長の親父さんがロシア民謡を披露してくれた。
翌８月１８日は午前７時にキャンプ地を出発した。前日からの雨で川が増水しており渡る場所を探すのに少し手間をかける。ロシア人の登山ガイドが２人と私たちのツアーガイドのスラークさんも参加して登山を開始する。１０時ころ、１２００メートルのところで小

休止。ここからは、展望がよく、広い山裾とキャンプ地が眼下に見えた。このあたりから、雪渓を横に見ながら高度を上げていったが、途中から雪か霰かが横殴りに吹いて、顔がびしびしと痛くなるようになった。１２時ころ、２０００メートルのところに岩小屋があって休憩したが、ツアーリーダーが登山者の調子や天候の厳しい状態から登頂を断念すると決定した。頂上までは７００メートルぐらい火山灰の砂滑りを直登すればいいようである。残念であったが、下山は別のルートをとって、火山灰でブスブス埋まるところを一気に駆け下りた。ホテルに戻る途中に青空市場があって、鮭の燻製やイクラを山盛りにして売っていた。鮭の燻製は結構美味であった。

現地ガイドのスラークさんは、ウラジオストックの出身でカムチャツカの大学の観光科を出て、カムチャツカで住むようになった。奥さんと今年生まれた女の子がいる。今回の我々の案内で今年の夏の仕事はおしまいになり、明日から仕事を探すとのことである。また、ダーチャという郊外の農地を持つており、そこでジャガイモなどの野菜作りをするそうである。カムチャツカはロシアといっても、モスクワまでは飛行機で９時間くらいかかるが、日本からは３時間くらいで、日本とカムチャツカはお隣さんですから、との言葉が印象的であった。
今回の登山は、未知のカムチャツカの広大な自然とそこに暮らす人を感じることができた。

北アルプス縦走

上高地～槍ヶ岳・笠ヶ岳～新穂高　（現役・OB 山行）

松本和也（現役・山岳部員）

Ⅰ期間：9/2～9/7（縦走は 9/3～9/6）

Ⅱ人数：2 名（佐々木　惣四郎、松本　和也）

Ⅲコース（下に詳細）：上高地～前穂高～槍ヶ岳～双六～笠ヶ岳～笠新道～新穂高（下山）

Ⅲ在阪連絡：上田　忠士

夏季休暇を利用して槍ヶ岳へ、という先輩のお誘いに乗り、昨年９月の富士山以来の 3000m 越えに挑戦しました。北アルプスの縦走は 2 回目の私と、山岳歴 40 年以上の大先輩という異色な組み合わせでの縦走となりましたが、天候の加護もあって堂々たる山々の頂点を踏みしめることができました。
以下に、簡単ではありますが、山行の感想を書かせて頂きます。

9 月 2 日（火）：大阪から松本までＪＲ、松本から私鉄とバス（片道¥2400）を乗り継ぎ、時間通りに合流。クマがテントを襲う事件が相次いでいるらしく、バンガローに泊まる。
料金は、半額の３０００円。

9 月 3 日（水）：頂上はガスで見えないが、バンガローを出て 30 分歩き、登山道口に着く。ここで一度在阪連絡先の上田様に電話するも、都合付かず。荷物が重い上に紀美子平に行く途中から雨に降られる。５ピッチ（５時間半）にて紀美子平に着く。前穂往復するも見通し悪く、雨で岩が怖い。奥穂高に行くまでも雨と、すべりやすい岩場で順調に体力が削られ、肩で息をしながらようやく山荘に。学生らしき一行はテント 2 つの大所帯。他にもテントが 2、3 張っていた。奥穂高山荘の水は 150 円/ℓ
ブロッケン現象が雨あがりのガス中に発生し、影が写る。
9 月 4 日（木）：雨で出発を遅らせたが、それが好結果を生む。朝雨が止んだ後は雨降らず、食料が減ったので荷も少し軽くなった。涸沢岳から見た景色は秀逸。登る気力が湧いてくる。涸沢岳からの下りは、鎖と梯子の連続で、危ない地帯もあったが、比較的快調に北穂岳に着き、Ａ沢のコルからキレットを超え南岳小屋に着いた。ここで（所期予定の）槍ヶ岳山荘まで行くかどうか迷ったが、先輩の判断で止めに。テントの中に入って少しすると夕立。助かった。南岳山荘の水は 200 円/ℓ。バイオトイレが目新しい。

9 月 5 日（金）：夜の間に降っていた雨も都合よく止み、定刻通りの出発。山荘からすぐ南岳に着くが、頂上に立っている間ガスが晴れ、迫力の槍ヶ岳を堪能でき、さらに北穂、滝谷、奥穂、前穂がガスの上に聳えていた。昨日より荷物が軽くなったため、スピードも上がる。南岳～槍ヶ岳間は歩きやすく、槍ヶ岳がどんどん近づいてくるので登ってきた実感

がある。槍ヶ岳を往復した後は下り基調でスイスイ進む。乗越からの登りが少し辛かったが、１４時に双六小屋に着いた。この日もテントに入ると雨。また助かった。

9 月 6 日（土）：天気は良好。念願の笠ヶ岳に行けるので嬉しい。朝だけ笠ヶ岳が望めていたが、１０時頃からガスの中となった。少し上り下りして抜戸分岐で空身になり、笠ヶ岳を往復する。縦走時から多くの人（韓国人の多いこと!!）とすれ違っているが、土曜日ということもあって今日の人は多い。笠ヶ岳にガスがかかっていたことが残念ではあるが、雨が降らなかっただけ感謝、感謝。
しかしここからが長い。クリヤ谷が長いので笠新道から降りたのだが、これも十分長い。新穂高に着くと、足と膝が痛く、歩くのに難渋する始末。穴毛谷から降りたらどうなったのだろう。新穂高では一年前に訪れた時と様子が変わっていて、中崎山荘の建物が取り壊された模様。不況なのか、ちょっと寂しい。無料温泉に４時２０分に着くが４時で閉鎖。

9 月 7 日（日）：朝から新穂高の無料温泉に入る。その後濃飛バスで 1 時間 30 分ほどかけて高山まで。新穂高と違って観光客でたくさん。先輩行きつけの焼ソバ屋（チトセ）で昼ごはんを食べる。並盛りで 480 円。電車待ちまでの間散策してみたが、楽しそうな町だった。

※山行の記録

9 月 3 日（水）：上高地 06：00⇒11：30 紀美子平（⇒12：00 前穂高岳⇒12：20 紀美子平出発）⇒15：30 奥穂高岳⇒16：20 奥穂高山荘テント場

9 月 4 日（木）：テント場 07：30⇒涸沢岳 07；50⇒北穂高岳 10：30⇒12：50 大キレット⇒14：30 南岳小屋テント場

9 月 5 日（金）：テント場 06：00⇒08：40 槍ヶ岳山荘（⇒09：00 槍ヶ岳⇒槍ヶ岳山荘 09：30 出発）⇒10：15 千丈乗越⇒12：40 樅沢岳⇒14 ：05 双六小屋テント場

9 月６日（土）：テント場 06：00⇒07：10 弓折分岐⇒08：50 秩父平⇒10：00 抜戸岳分岐（⇒11：00 笠ヶ岳⇒12：30 抜戸岳分岐出発）⇒13：15 杓子平⇒16：20 新穂高

黒戸尾根から地蔵尾根へ

山　田　裕　敏

平成の世は、まだ始まって間がないと思っているうちにもう２０年が経ってしまい、それでも良く考えてみれば、昭和の初２０年ほどではないにしても、相当に激しい変動のあった期間だったと回顧される。

特に今年、平成２０年は個人的にも特筆事項が多い年で、正月４日に小学校からの山友達で近所に住む医師澤井敏安君の急死に出会い、数度のスキー行の後、４月には３回目のネパール・トレッキングで念願のティリツオ湖畔周遊とムクチナート詣を達成、６月に４１年に亘り生きがいを提供してくれた商船会社とそのグループ会社を退職し、それと相前後して約８年過ごした京都/大阪暮らしから東京に舞い戻るなど、目まぐるしい前半であった。７月には駒ヶ根山荘を起点とする山行を２回持って猛暑対策としたが、秋のマナスル・トレッキングへの誘いは、新たに始めた仕事への順応時期なのでお断りし、１０月を迎えた。

この月は吾が誕生月に当たりこれで６５歳を迎えたわけだが、既述のような身辺の変動を踏まえ、今後どう生き、どう遊ぶかに思いを巡らせているうちに、世界経済が１００年に一度と言われるほどの大収縮を起こしてしまい、まるで昭和２０年の大空襲に見舞われたかのようなこととなってしまった。まあ全てが灰燼に帰してしまった訳ではないし、１０年ほども経てば戻るだろうと楽観するとしても、尋常の精神状態を保つのは容易なことではない時期だった。それでも１０月１４日の信州伊那国際GCでの山岳会の例会には参加を申し込んであるし、そこにどう到達するかも予ねてから温めていた案があった。気力は可成り落ちているものの天候見通しは良く、現地でのエスコート体制は万全なので、出かけることとした。

１０月１１日　新宿駅朝７時発の「あずさ１号」の自由席にうまく座れ、韮崎で下車。列車が遅れバスは出てしまったので、已む無くタクシーにて登山口の竹宇神社に至る。ここから黒戸尾根を辿り甲斐駒頂上を目指す。この尾根は落差が2,200mあって、長さと急峻さとで日本有数の尾根である。特に五合目から上部は岩の露出が多く、階段や鎖が整備されている。３連休の初日で天気も先ず先ずの割には人出が少ない。最近は北沢峠からの交通が整備されたので、そちらがメインルートとなっている由である。登山道のあちこちに山岳宗教の名残の石像や石碑が見られ、江戸時代には駒ケ岳講が盛んであった様子が伺える。2,400m辺り、七合目に七丈小屋が二棟建っており、今日はここまでとする。高度差1,600mを６時間掛けて登ったこととなる。全くの素泊まりで3,500円と少し高いが、石油ストーブが終日点り、その上の大きな薬缶のお湯は汲み放題。太陽光から得た電気で室内は明るく、トイレに入れば自動点灯されるという快適さ。下の方で拾い集めた小さな栗３０粒程を茹でて間食とする。絶好の時間つぶしとエネルギー補給だった。

１２日　５時半ごろ外に出ると、富士山の五合目あたりから左方面　武甲山域に雲が走り、その赤い一線の上部は橙色に染まり、上空は薄蒼空と実に豪華な夜明け前の光景を楽しめた。

雪が付けば相当の難儀を強いられるだろう岩尾根を登ること2時間余りで駒ケ岳頂上に到達。この頂上は現役3年の秋、冬山偵察として鋸方面から登って以来なので、43年ぶりとなる。

下山路では駒津峰付近で北沢峠発の面々とゆき違い始め、それがずっと下まで続きうんざりする。しかし紅葉の美しさはこの辺りから双児山までが最高で、また秋の事とて遠方も澄み渡り、北アルプスは遠く白馬方面まで見通せる。10時半北沢峠着。そこから仙丈岳五合目までの急坂を上り返し、馬の背小屋泊。

１３日　６時頃出発。途中仙丈小屋に立ち寄る。この二つの小屋は、立派の一言に尽きる。特に仙丈小屋は騒音と振動を抑えたヤンマーの発電機が稼働しており、違いを見せつけられた。勿論トイレも快適で、こういうのをネパール各地に作りたいものである。初めての仙丈岳を踏み、８時に地蔵尾根の下山路に入る。上部はかなり急傾斜。踏み固められた道に赤テープが休むことなく付いており、誰とも出会わない山奥の道を紅葉と木漏れ日を楽しみながら粛々と下ってゆく。松峰小屋には３時間で到着。あと３時間即ち１４時に下山地の市ノ瀬に丸子さんの車の出迎えを受けることになっており、予定通りと安心する。所が、である。小屋に寄るためにここまで降りてきた尾根筋を左側に外したので、本来の道は小屋へ下った同じ道を登り返さなくてはならないものを、小屋から小谷を越えて反対側の上り道を取ってしまった。小屋から通しで次の道が始まるものと思い込んでしまったのである。勿論あまり上等ではないが道らしいものがあるからそちらへ進んだのであるが、一向に赤旗が出てこない。いやな気分でさらに行くと、前方の沢に黒い大きな動物が水を飲んでいるのに出会う。少し見上げる形で臀部が大きく見え、これは熊だと判断した。進むわけにはゆかないし、どうしようと思いつつ小屋まで戻る。このあと左へ大周りを試みたりと右往左往のうちにまたその黒いものに出くわし、今度はカモシカだったことが判り、兎角する内に道の迷いにも気が付き軌道を修正したのであるが、２時間を失ってしまった。そこから駆け足で下ったが、14時半にようやく丸子さんの携帯と連絡が付き、15時半に最奥の民家前にて収容された。こんな予定外の動作があったが17時前に山荘に到着し、いつもの方々と一緒に温泉に浸かる。山荘ではこの日もやはり一番に着いた大堀さんと、二番目の丸子さんとで夏刈取った木や草を燃やし、午後からは藤木さんたちが階段の廃材で大きな焚き火をやってご近所の顰蹙を買った、とか、ストーブ用の木っ端の荷受、買い物と夕食作りに皆様ご活躍だった由。小生はお客様で、特製カレーと銘酒をたっぷり戴いた。

14日　10名、3組でコンペが始まったが、早くも3ホール目辺りから雨となる。午後から雨脚も強くなり、大ぬれのゴルフだったが、山行三日間の晴天と疲れの出ない体調に感謝し、楽しくホール・アウトできた。特筆事項は小笹さん、180mをワン･オンしてニヤピン賞、シングルの大堀さんは他の賞を総なめしたが80チョットで3位、大分乱れていたがハンディに守られ久保田さんが優勝、各ホールを略ダブル・ボギーで上がった小生がHCP30を貰い２位となった。いつもの店で野菜と果物を買い、廣瀬君持参の泉州牛のすき焼きをつつき、いつもの山の歌を歌いと、毎年やることは変わらないのだが、この乱世を生きてゆくにはこんな家族のような、たまに戻ってゆく場あることがとても貴重なことだと思われる。黒戸尾根と地蔵尾根とを通しで始めて一人で歩いてきた、と言えば、よくやったと評価してくれる人々が居て、それなら次は何処を目指そうかと思うものである。

マナスル周遊とラルキャ峰登攀

佐々木　惣四郎

１０月７日にカトマンズを出て、１０月２９日カトマンズに戻りました。今回は小林　深　さんと友人の上原さんとの３人の旅でありました。トレック３日目に上原さんが左足くびを捻挫され　運搬用にカゴを作成し、ポーター２人に順に担いでもらい　８日間かけてサマ部落にいたりました。当初捻挫なので３－４日たてば歩けるだろうと思っていました。しかし、足の状況がなお思わしくなく　サマ部落よりヘリにてカトマンズに１９日帰られました。８日間もカゴにゆられるという貴重な体験で、記録に値します。

マナスルトレックは　マナスル、P29,ヒマルチュリ　等の山が独立的に聳え　素晴らしいパノラマで、撮影ポイントも多く、小林さんも至って満足で、小生も使いなれぬ三脚で、いろいろ指導うけながら堪能しました。またブリガンダキ川に沿ったトレック道からは　ジャガット、ニヤック　あたりで川に迫る岸壁はほとんど垂直で１５００m－２０００mをゆうに越え、“凄い”の一語につきます。
トレック５日目のタトパニでは、温泉が湧き出でて、久し振りに頭を洗う。またサマ部落は、信じがたい程、朽ち果てた様な家が立ち並び、サマに至る部落も、朽ち果てた様な家多く、バッテイ泊まりの旅は、極めて難しい状況です。バッテイはサマとソムドウにありました。

今年のマナスルは、中国がシシャパンマ、エベレスト、チョーオユー　等の登山許可をチベット騒動が原因で全てキャンセルした為、マナスル登山に４７隊が集中して大繁盛の状況。しかし、９月度の天気が悪く、成功したのは５－６隊のみでありました。

我々３人は、サマ部落に１０月１８日に着き、左足首を骨折し（カトマンズ到着後、骨折と判明）８日間カゴに背負われてマナスル詣でをした上原さんを、ヘリで１９日カトマンズに見送り、２０日小生一人がシェルパと４８６０mの現在のベースキャンプに行き一泊してきました。サマ部落は３４５０mでしたので１４００mの高度差は４時間半かかりました。ここは日本隊がキャンプＩ　を設定した場所にて、氷河の大幅後退（半分に減少）により、ベースキャンプ変更が余儀なくなったものです。

ベースキャンプは非常に広く、カナダ隊のみがアタック中で、他隊は全て撤退済みで、山岳ガイドの隊員１人が居て歓談し、アタック中の写真を携帯デジでイロイロ見せてもらい、テント、食事　等すべて提供して頂きました。マイナス１０度ぐらいの翌日、日の出写真を撮影し、下山、サムドウに移動。

サムドウから始めてヒマルチュリが見えて日の出撮影。これまでヒマルチュリと思っていた山が間違っていた事が判明。全行程通じ、ヒマルチュリが見えるのはここだけでした。

２３日ラルキャ峰アタックのベースキャンプとなるラルキャ峠手前の　５１００mに到着し２泊。シェルパがフィックス工作で登頂して、頂上より１５０mのフィックスを張る。ベースキャンプからルートが８０%正面に一望でき、１０００mの高度差の雪壁で３０度－６０度（頂上直下のフィックス地点）で小林さんは早々に断念。テクニカルポイントはなく雪壁登りだけであったが、雪も柔らかく、ラッセルも強いられ、頂上からの眺望も限定されている事が判明し、戦意喪失し、気合が入らず佐々木も断念した。

しかし、ラルキャ峠からの眺望は素晴らしく、ヒムルンヒマール、ヌムジュン、ギャルカン　等日の出撮影。峠は５１２５mで雪に覆われ、下りの３０分は雪がテカテカで、ポーターにはやばく、２５日峠を超えて、ビンタンに入る。ビンタンの直前から、マナスル北面、Ｐ２９、プンギ峰　等が展開し、まさに圧巻の様相。振り返ればチェオヒマール、ヒムルン、ヌムジュン　が大きい。

今回は登山出来なかったものの７日間ほどは朝５時の暗いうちから撮影準備し、日の出撮影にかかり、トレックを堪能できました。また小林さんはビンタンから風邪をひかれ、日本に帰りつく１１月１日まで喉の痛みと咳に悩まされました。兎に角、展望台に恵まれた地形で写真にはもってこいの感じで素晴らしいトレックルートだと思います。日本人の方には一人もあいませんでした。

マナスル山群一周・撮影行

小林　深

約１ヶ月の予定で、マナスル山群一周のトレッキングに出かけました。参加者は佐々木惣四郎さん、近山会の上原氏との３人。

最低高度５３０ｍから最高高度５２００ｍのラルキャ峠を越えて、総トレック距離２２０ｋｍ、総歩行時間６２時間（ＧＰＳのデータ）の旅でした。当初はラルキャピーク（６０１０ｍ）を登る計画でしたが、３０～６０度の雪壁が稜線まで高度差８００ｍも続き、一部胸までのラッセルがあるとのことで、私の体力では一気に登るのは無理と断念しました。

低地では毎朝１０時頃まで曇り、以後夕刻まで晴れと判で押したように同じ天気が続き、高地（３０００ｍ以上）では逆に毎朝快晴、午後からガスが発生、夕刻には雪がチラついたりの毎日でした。以下、写真撮影を中心にレポート致します。

１０月７日～１０月１５日　　カトマンズ～Ｌｈｏ

カトマンズからＧｏｒｋｈａまでチャーターバス、１時間ほど歩いたＫｈａｒｉｋｈａｔａｎｇがキャンプ初日、ここからＬｈｏまでがＧａｎｄａｋｉ川沿いの低地トレックである。低地はインド系の住民が多く、ヒンズー教の神様が村に祀られているが、高度を増すに連れてモンゴロイド系が多くなり、ラマ教のゴンパが主体となる。

Ｌｈｏまでは、時々日中にＧａｎｅｓｈ　Ｈｉｍａｌの美しい山々が遥か遠くに見えるだけである。山の写真は諦めて、デジカメでスナップ写真を撮りながら歩くことになった。トレック２日目に上原さんがスリップ転倒、足首を骨折し、ヘリポートのあるＳａｍａまで８日間　ポーターに担がれて行くことになった。

１０月１６日～１０月２５日　Ｌｈｏ～Ｌａｒｋｙａ 峠～Ｂｉｎｔａｎｇ

Ｌｈｏ（３０２０ｍ）に入るとマナスルがその威容を見せる。ここからＬａｒｋｙａ峠までが撮影の場となる。

Ｌｈｏに入る日、前方に鋭い高峰が見え始めた。村民に尋ねたらマナスルだと言う。双頭のマナスルとは随分形が違うが、見る位置によって大きく変わるのだろと思いながら、マナスルとの最初の対面なので三脚立てて撮影していたら、シェルパのテンバがやってきて、マナスルとは違うと言う。この辺りの村民は、マナスル山群の山は全部マナスルと言うのだそうだ。なるほど、と納得。

Ｌｈｏのテント地に着いて、直ぐ近くの学校の横の丘に上がってみたら絶好のポイントがあった。翌朝は５時半よりこのポイントで撮影体制に入るが、ほんの１分ほどで朝焼けはあっけなく終わってしまい、上手く撮れなかった。マナスル撮影の難しさが分かった。

Ｓｈｙａｌａ（３３３０ｍ）。ここはマナスル、Ｐ２９，美しい無名峰　の３山が全部見渡せる絶好の地である。しかし、到着直後には雲が発生、遂にマナスルの山頂は現れなかった。Ｐ２９、無名峰　は綺麗に見えていたが、午後の光は撮影に適さなかった。夕刻には空一面に雲が発生、以後毎日同じ繰り返しとなる。

ＳｈｙａｌａからＰｕｎｇｇｙｅｎ氷河を数百メートルほど登るとマナスルとＰ２９が目の前に見えるポイントがある。佐々木、アンニマ（カメラポータ）との３人で簡単な朝食を取って、

２時半に出発。５時前に絶好のポイントに到着。６時より朝焼けが始まり、短時間の光のドラマを大忙しで撮影した。

ＳａｍａＧａｏｎ（３３９０ｍ）。ここで上原さんのヘリを待ち、無事カトマンズへ送った。テント地からはマナスルが少し顔を出しているだけである。Ｇａｎｄａｋｉ川の対岸の山を少し登った辺りに見える放牧場の上辺りが絶好のポイントである。マナスルも３度目ともなると、撮る要領が分かってきた。この日は早くに出掛けたので、月光に光るマナスルも撮影できた。更に、日の出の前にマナスルが白銀に光り始めた。多分、朝日が高空の雲に反射してマナスルに届いたのであろう。その後で一旦暗くなり、朝焼けがやってきた。

ＳａｍａＧａｏｎの近くにＫａｓｕｐａｎｇと言うＶｉｅｗＰｏｉｎｔがガイドブックに書いてあったので、朝食後に出かけてみた。ＳａｍａＧａｏｎから１時間半程登った地点であった。マナスル三山が良く見渡せる絶好のポイントであった。ＳａｍａＧａｏｎよりもＳｈｙａｌａから登った方がずっと近いポイントである。

ＳａｍａＧａｏｎからマナスルＢＣ（４８００ｍ）へ上がる予定であったが、連日の撮影で疲れが出たのか、手足に浮腫みが出たのでＢＣ行きは断念して１日休養することにした。佐々木さんがシェルパのテンバとＢＣへ出掛けた。しかし、ＢＣからはマナスルは見えなかったとのことである。幸い浮腫みは、１日の休養で完治した。

Ｓａｍｄｏ（３９００ｍ）。テント地の直ぐ上の畑跡に上がると、やっとヒマルチュリが見え、良く見える。朝の撮影を行ったが、残念ながら少し靄っていて光が弱く、良い写真は撮れなかった。

ＬａｒｋｙａＢＣ（５１５０ｍ）。ＬａｒｋｙａＰｅａｋを登るために設けたＢＣで、Ｌａｒｋｙａ峠の少し手前である。マナスルは見えないが３６０度、山々に囲まれた絶景地である。朝の撮影は、峠を少し越えた辺りがポイントである。ＣｈｅｏＨｉｍａｌ（６８２０）、Ｎｅｍｊｕｎｇ（７１４０）、ＧｙａｊｉＫａｎｇ（７０３８）などの山々が朝日に燃える。唯一残念なのは毎朝雲一つない快晴で、スッポンポンの写真ばかりしか撮れないことであった。

Ｂｉｎｔａｎｇ（３８５０ｍ）。峠から一気に下ったキャンプ地。マナスルの西側になる。夕景の適地であるが、午後は毎日雲が出て写真は撮れない。朝は太陽が山の向こうであり、撮影に適さない。西側のＮｅｍｊｕｎｇの朝焼けが美しい。昨夜から風邪気味になり、トレック終了まで引きずってしまった。

１０月２６日～１１月１日　Ｂｉｎｔａｎｇ～カトマンズ～関空

Dharapani からはアンナプルナ街道に入り、様相ががらりと変わる。綺麗なホテルが建ち並び、トレッカーも多く、まるでリゾート地のようである。

やっとの思いでトレック終了地Ｂｈｕｌｂｕｌｅ（１０００ｍ）に到着、この４日間が風邪のため一番辛かった。

デジカメのスナップ写真が約６００枚、フィルム写真はブローニー判で３９本（４６０枚）が写真の成果であった。が、果たして気に入った写真が何枚撮れたかとなると、？？？である。

＊廣谷氏インタビュー（その２）

（前号の続き）

「組織体制が固まり、活動が本格化した時期」（５月の書簡）について

＜いろいろと御苦労様（計画書出来ました）＞（５／７付の書簡）

・学長がヒマラヤ委員会委員長に／大阪市の後援内定

＜森本氏宛て橋本氏書簡（写し）＞（５／１０付の書簡）

・外務省宛て等の書式例連絡

＜いろいろと御苦労様（おかげさまでJACの方はスムーズに）＞（５／１２付）

＜最近の状況＞（５／２５付の書簡）

・後援／学校／計画書作り／渉外／募金

「登山計画の検討・掘り下げ時期」（６月、７月の書簡）について

Ｂ６サイズのメモ（６／２５付）

・　情報提供と収集依頼（登攀用具、特に滑車等）

葉書（６／２１付）

・　同志社隊が（カトマンズの）登山局長からOKを取って呉れた

＜暑いですな（学生を入れて６人の隊に落ち着きそう）＞（７／３付の書簡）

＜お暑いことで…（６人サーブでの行動表を送る等＞（７／１６付の書簡）

—入山許可の内諾がとれて良かったですね。

廣谷　森本さんが同志社大・アピ隊の津田隊長に頼んでいました。津田隊長の指示で平林氏が動いてくれたと思う。平林氏には四光峰でもお世話になっているのですよ。

「隊員６名の修正計画＆募金計画の決定時期」（8月の書簡）について

＜廣谷君（隊員６名の修正計画＆募金計画を今月決定）＞（８／１８付の書簡）

＜速達拝見（９／２４に総会を開き、発表予定）＞（８／２７付の書簡）

—５人の隊員から学生を入れて６人の隊員になりました。「隊が弱い」と森本さんが考えておられた時、「学生を必ず入れること」との大学・大阪市の要望が出たのは渡りに船だったかも知れませんね。

「入山の正式許可を得る一方、波乱要因も出た時期」（9月の書簡）について

＜廣谷君（入山許可おりた由、何よりです）＞（９／１０付の書簡）

＜新事態について（隊編成の見直しおよび資金計画の見直し）＞（９／２０付の書簡）

［藤本氏書簡有り（慶応大ヒマルチュリ隊装備の購入検討）］（９／２４、２６付）

—正式な入山許可が下り、「大阪市・大阪府・商工会議所の後援を得ることができる」前進がありました。他方では、火付け役の先輩が本計画から降りるという事態が生じました。

廣谷　計画をゼロから見直すという状況になりました。そして同じ頃に私の方でも、私の進退が社内で紛糾していました。大変だったですよ。

—波乱要因は生じましたが、とどのつまり、森本さんは当初からの志（どうあっても、エクスペディションは出す）を遂げられました。ところで、装備は藤本さんが担当されていたのですね。

廣谷　そうです。　ただ、大阪で選定はしても、現実問題として調達は殆んど東京ですることから、連絡し合っていました。装備は、直近の慶応大・ヒマルチュリ隊を参考にし、購入も検討しました。隊員の田辺氏を通じて情報収集し、その後富士山でチェックもしましたが、結局持参したいものが全て再使用不可でした。それは　ともかく、田辺氏にはお世話になりました。

—１０月以降募金も開始して、いよいよ遠征準備活動が佳境に入ります。

＜（実行計画をヒマラヤ委員会に提出し、承認を受ける）＞（１０／８付の書簡）

＜（装備関係について）＞（１０／２７付の書簡）

［藤本氏書簡有り（テントについて）］（１０／２４付）

—ただ、１１月に隊員予定者の健康問題という思わぬ事態がありました。

葉書（１０／３０付）

・　健康診断予断許さず。君は辰沼病院へ。

葉書（１１／３付）

・辰沼氏の結果は速達で西宮の小生宅へ送れ。

＜（川勝君の件…明日、市大病院へ行きます）＞（１１／６付の書簡）

＜（川勝君の件…断念と隊の構成）＞（１１／１０付の書簡）

辰沼病院は東京ですよね。健康診断をそこで皆さんされたということですか。なぜなのですか？

廣谷　森本さんには、「単に健康状態を診てもらうのではなく、高所に強いか弱いかの適性をも診てもらい」高山に登ることの可否判断にしたいとの意向があったのです。

辰沼先生（慶応大医学部出身）はマナスル経験者で高所医学の草分けでしたので。

—そこで思いがけず急性肝炎が発見され、川勝さんは参加断念ということになりました。あれやこれやありますね。

しかし、やるべきことを必死になってやる実務段階にあり、池永さんの会社（特殊変圧器。現ダイヤモンド電機）を隊荷の集積場所に提供していただいて、進められていきました。
１２月には船便への隊荷集積の手配、翌年１月に出発日程の調整、そして２月に綱渡りの慌しさで日本出発に漕ぎ着くことが遂にできました。

森本レターを読んでいますと、昭和３６年２月２日付レターが「小平町は速達も遅いですなぁ」で始まっているように、率直な人柄がよく伝わってきます。
森本さんはどのような方だったのでしょうか？
廣谷　誠実な苦労人で、決断早く率先して動く方でした。

—本日「森本レター・ファイル」に関してお聞きしようとしていたことは以上です。
なお、「森本レター・ファイル」以後についても、関連で少しばかり伺いたいことがあります。
それは、１９６４年（昭和３９年）の二次ランタン・リルン隊の前に存在した“幻のランタン・リルン隊”についてです。伝聞では、その時の隊長は三島さんだと伺っています。実現しなかった理由は何だったのでしょうか？「１９６３プレ計画は、日本山岳会の外貨事情悪く…」（１９６４年計画書）とありますが。
また、経過や隊編成に関してご存知のことを伺えれば幸いです。
廣谷　“幻”に至った原因としては、①９月の「中印国境紛争によるインドの非常事態宣言」および　②１０月の三島さんの健康問題（心臓寄りの動脈異常）による辞退、の影響が大きかったと思っています。
実は、“幻の隊”の経過に関する「三島書簡」も現存しており、私の手元にあります。
それは、１月の「ヒマラヤ遠征準備打合せ会」議事録（昭３７.１.１６開催）に始まり、１０月の三島書簡（１０／２７付）で終わっているものです。
—準備委員会や実行委員会の編成はどのようになっていたのですか？
廣谷　議事録によれば、以下の通りです。
実行委員会：委員長＝三島、海外関係＝青木、庶務＝川勝、装備＝浅井、食料＝伴
準備委員会：村松山岳部長以下１６名（鈴木・１９６４年二次リルン隊長を含む）
東京関係　：廣谷、山本
実行委員会学生メンバー：伴、山辻、岡本、下井、常慶
なお、実行委員会は毎週土曜日開催となっています。於：特殊変圧器（株）
—三島さんの私信以外の議事録等は湿式コピーのため、判読しづらくなっています。
廣谷　「三島書簡」も、「森本レター・ファイル」と同様に整理し、保管するようにしてもらえればと思っています。
—その方向で考えてみます。本日は長時間のインタビュー有難うございました。

[補記]

1.「三島書簡」について

インタビューの後、１１月＆１２月の手紙および「打合せ MEMO」（昭和３８．１．２２付）が発見されました。その結果、廣谷氏が保持されていた「三島書簡」のファイルの中味（種別と概略）は以下の通りとなります。

＜種別＞

・会合の議事録（「ヒマラヤ遠征準備打合せ会」から始まる実行委員会の記録）

・三島氏の手紙（廣谷氏、山本氏　宛て）および添付書類

・遠征延期についての打合せ結果（「打合せ MEMO」）

＜概略＞

・昭和３７年１月～１０月：“１９６３年プレ”に向けた準備活動
日本山岳会の早期審査＆推薦を得る活動に注力

・　〃　１１月～１２月：代替案として学術調査隊の検討、
日本山岳会・海外登山審議会（１２／９）対応、
審議結果を受けて“１９６４年プレ“へ延期決定

・昭和３８年１月　：遠征延期の広報（対　外部、対　大市大山岳会内）

2．当時の海外登山事情について

—以下は神戸大学山岳会の会報「山と人　１４号」（４８～４９頁）で金井健二氏（１９６３年の南米ボリビア遠征隊・隊長）が述べられている内容です。

「当時の日本は国際収支が赤字で保有外貨も２０億ドルを割る状況で、海外渡航のための外貨割当を大蔵省は極端に制限していました。そしてこの外貨割当の許可がないと外務省は旅券を発給しない訳ですから、海外登山を至難なものとしていたのです。（中略）当時、体協には国際試合などの為のスポーツ外貨の割当があり、その内登山用に年間約１万ドルの枠があり　その割当管轄を日本山岳会が行っていました。この外貨枠内での割当を受ける為に、多くの山岳会が遠征計画を日本山岳会に提出してその審査を受ける訳です。（後略）」

—＜注＞（奥田）①審査窓口としては、日本山岳会だけでなく全日本山岳連盟にもあり、その審査を経てビッグホワイトピーク（ジュガールヒマール主峰）遠征を皮切りに海外登山が実施されている。

②海外登山をする場合、上述のスポーツ外貨枠割当を受けるやり方とは別に、学術調査によって一般外貨枠割当を得、海外登山をするやり方もあった。

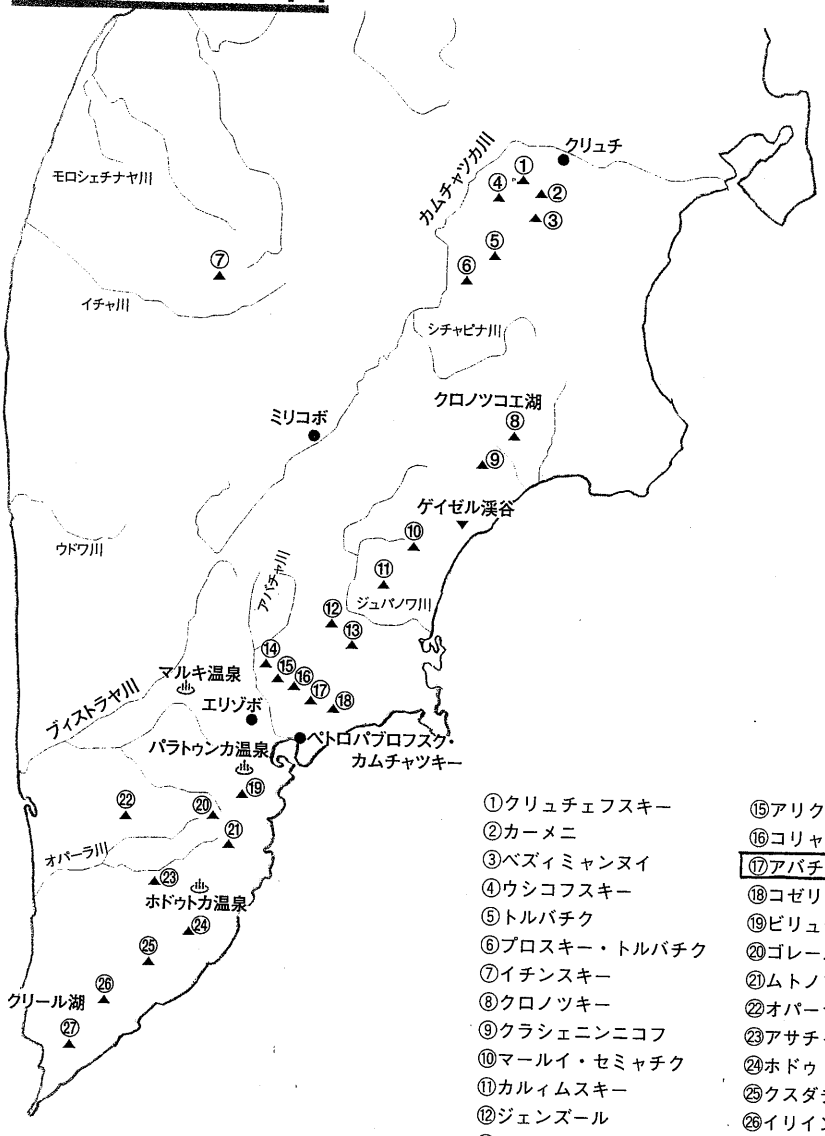
3．日本山岳会・海外登山審議会（昭和３７.１２.９）の審査により推薦を受けた３隊の実施時期について

神戸大・ボリビア遠征隊　…　１９６３年５月～１１月

同志社大・サイパル遠征隊　…　１９６３年ポストモンスーン期

大阪市大・（二次）ランタン・リルン遠征隊…　１９６４年プレモンスーン期

カムチャツカの山



①クリュチェフスキー
②カーメニ
③ベズィミャンヌイ
④ウシコフスキー
⑤トルバチク
⑥プロスキー・トルバチク
⑦イチンスキー
⑧クロノツキー
⑨クラシェニンニコフ
⑩マールイ・セミャチク
⑪カルィムスキー
⑫ジェンズール
⑬ジュパノフスキー
⑭アアグ
⑮アリク
⑯コリャークスキー
⑰アバチンスキー
⑱コゼリスキー
⑲ビリュチンスキー
⑳ゴレールイ
㉑ムトノフスキー
㉒オパーラ
㉓アサチャ
㉔ホドゥトカ
㉕クスダチ
㉖イリインスキー
㉗カンバリヌイ

⑰

アバチンスキー火山

（またはアバチャ、アバチンスカヤ火山）

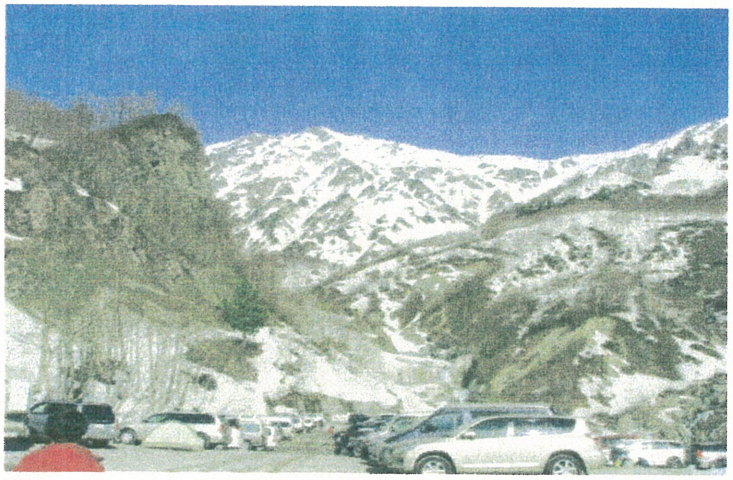
コリャークスキー火山などと「アバチンスキー火山群」を形成する。標高2,741m。その姿はペトロパブロフスクからも見ることができる。この250年間に13回もの噴火があり、最近では1945年と1991年に噴火している。

アバチンスキー火山群（伊東氏撮影）

出典：「ロシア極東２　カムチャッカ」（北海道新聞社編。２００２年２月刊）

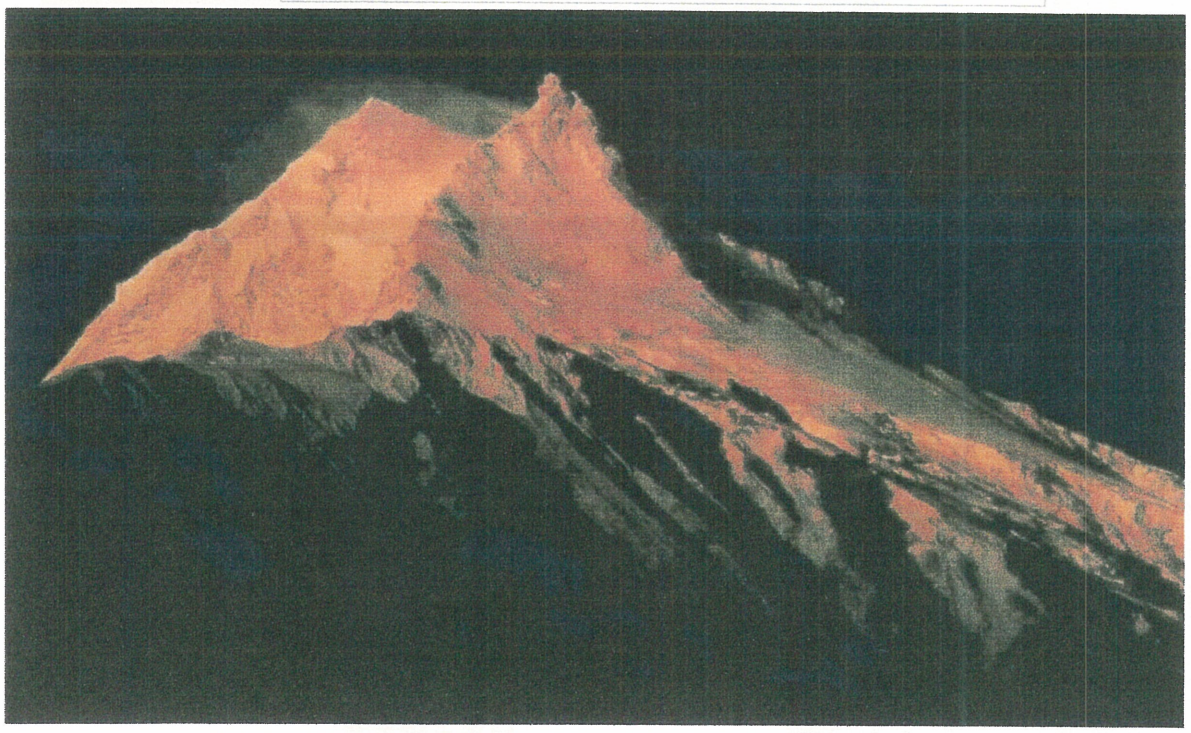
オーストリア・アルプス　パスツエル氷河最奥の山

白馬主稜　P2付近



白馬主稜全景

マナスルBC　4,860mの日の出　撮影 佐々木惣四郎



日の出のマナスル　（サマ部落の前の丘より）　撮影　　小林　深

[編集後記]

一今般、大学関係者による「小林治俊先生遺稿集」（平成18．3．20発行）を読む機会を得ました。「議論好きで、酒を好む」面は、私としてもよく承知しているところですが、「数学を駆使した理論解析が得意」な研究者の側面や、「厳しく且つ優しい」指導教官としての教育振りは今回初めて知りました。山関係の写真もあって懐かしく、暫し、在りし日を偲びました。

一「感謝されない医者」（金田正樹著。山と渓谷社。2007年3月刊）を近頃、図書館で読みました。ヒンズークシュ登山歴程度しか認識していなかった著者の「ある凍傷Dr.のモノローグ」（副題）は大変面白かったし、更に『7　凍傷の病態』は読み応えのある内容であり、この部分だけでもお値打ちの本と思いました。（奥田　記）